

はじめに

コロナ禍のボランティア活動

ボランティアセンター長 首藤 若菜

2021年度は、昨年度に引き続き新型コロナウイルスの感染拡大により、大学も大きな制約を受けました。

本学では、春学期はオンライン授業がメインとなり、部活動やサークル活動にも自粛が求められました。友人と会う機会が減り、そもそも友人を作る機会さえ持てなかった人も少なくなかったと思います。飲食店での営業自粛が広がったことにより、アルバイトができなくなり、学費や生活費の工面に苦労した人もいたと思います。若者が孤独感を深め、心身の不調を訴えていることや、大学で退学者が増加していることは、社会問題にもなりました。

ただ、秋には感染者数が減少したことにより、部分的ではありましたが、対面授業が再開し、キャンパスに多くの学生が戻ってきてくれました。学内を歩けば、学生たちとすれ違い、マスク越しではあるものの、賑やかな声を聞くことができました。かつては当たり前だったキャンパス風景ですが、まるで大学が息を吹き返したように感じました。

ボランティア活動も、秋口には感染に注意しながら、部分的に活動を再開させることができました。ただ1年を通じては、多くのイベントを実施することができませんでした。本学院の一貫教育の柱ともいえる清里環境ボランティアキャンプは、2年連続で中止となり、長い歴史をもつ山形県高島町で行う農業体験も、開催することが叶いませんでした。

やむを得ないとはいえ、何年にもわたり中断が続くと、これまで蓄積してきたノウハウを引き継ぐことが難しくなっていくことが懸念されます。そこで、来年度は、感染に気をつけながら、たとえ小規模であっても再開できないかと、今年度からより具体的な検討を開始しました。

また、オンラインを活用した新たな取り組みにも挑戦しました。例えば、2021年12月には、バリアフリー映画上映会を開催しました。学生メンバーを募り、上映する映画を話し合い、「バリア」とは何なのか、バリアを自分事として考えると何に気づくのかなどの議論を重ねました。当日、映画『だれもが愛しいチャンピオン』を上映し、観賞後にはオンライン上での座談会を開催し、参加者とともに感想を共有しあう機会を持ちました。画面越しではあったものの、学生メンバーたちの生き生きとした表情が大変印象的でした。

ボランティアは、人と人が対面で接し、会話したり、触れ合ったりすることを前提としたものが多いため、コロナ禍のボランティア活動は容易に進みません。ただ、そうしたなかでも、何ができるか、何かできることはないかを、ボランティアセンターの職員、コーディネーターとともに懸命に考え、模索した1年間でした。

今後の状況はまだ見通せませんが、今年度の試みが次年度につながり、少しずつ活動を再開できることを祈っております。